

(要約版)

## 近世・近代における飯田・下伊那地域のたばこ生産と流通

### 1. 目的

本研究は近世・近代の飯田・下伊那地域におけるたばこの生産と流通の構造を分析し、この地域におけるたばこ産業の特徴を考察することを通して、この地域の社会構造の一端をあきらかにすることを目的とする。対象としては全国的なたばこ産地であった清内路村（現下伊那郡阿智村清内路）の史料をもとに、考察を加えてゆく。

### 2. 方法

これまでの先行研究については、たばこ生産を近世～明治 30 年代における村の基礎的な生業ととらえ、18 世紀以降の山林資源減少と、清内路村で年貢とされた<sup>くれき</sup>樽木（屋根材に使用される木材）が現物納から金納へ切り替わったことにより、新産業としてたばこが耕作されたと予測、たばこが村の基幹産業となったことを述べている。さらに明治 30 年代のたばこ専売化が清内路村の経済構造を一変させ、下伊那郡内の他村と同様に養蚕業へ転化していく見通しを立てている。しかし、幕末から明治期のたばこ生産と流通の発展に関する詳細な分析はとくに行っていない。こうした現状から、まず近世における清内路村のたばこ生産に関する特徴を整理し、これを踏まえた上で、明治以降こうした産業がどのように変化し、展開したのかを分析、考察していきたい。史料としては清内路下区有文書のほか、国文学研究資料館所蔵の下伊那郡諸村役場文書のなかから清内路村役場文書などを使用する。

#### 3-1 近世におけるたばこ産業

清内路村におけるたばこ耕作と流通は、基本的に先行研究の通り岐阜との関係を中心に在村部や城下町へ取引先が広がっていたこと、こうした取引を担う仲買的な存在が村の中に現れ始めたこと、そしてこうした産業によって村の人口を支えるだけでなく、賃稼ぎによる新たな産業も付随して発展したことが確認された。

#### 3-2 明治初頭のたばこ生産と流通

地租改正を通じて村内の課税対象となる耕地面積は格段に増え、村に課された税負担が近世と比べて重くなった。資本と刻み煙草の販路が整備されれば、村内で加工販売できる技術的素地はあったため、明治維新後美濃方面にとどまらず、都市圏と直接的な販路を拡大する原紋弥のような商人があらわれた。これは先述した地租改正に加え、明治 9 年に始まった煙草税の賦課に対応するため、より村内での収益をあげることをもくろんで、従来の村内煙草仲買がこれまでに蓄積した資本を用い刻み煙草の家内制手工業を行い始めたも

のとみられる。

### 3-3 明治10年代のたばこ生産と流通の様相

ここでは1884(明治17)年の史料をもとに、村内の生産と流通の諸相を見ておきたい。まずは村内の煙草耕作について、十年前の収穫目安量と比較すれば大幅に収穫量が増加している。とはいえ村内の耕地面積は1889(明治22)年になっても97町9反余と大きな変化はみられないことから、村内の刻み煙草加工が進展するにあわせて、煙草耕作へさらに特化した可能性がある。また耕作地のほとんどを組ごとに把握していた。仲買であり刻みたばこの加工者である製造人の移出先は個々に異なり、また年度によって販路も変化していた。さらにここでは刻み煙草の移出量が葉煙草のそれを逆転しており、村内で加工し販売するシステムが確立したといえるだろう。とはいえ、製造人が一手に買い付ける訳ではなく、たばこ耕作者が他国仲買へ葉煙草のほか刻み煙草に加工したものを販売する事例も多い。こうした生業が絡み合い、清内路のたばこ産業はなりたっていたといえる。

### 3-4 明治20年代のたばこ生産と流通の様相—製造人原澤喜之助の事例—

ここでは飯田市立中央図書館所蔵「清内路煙草資料」を用いて、当該期における製造人原澤喜之助のたばこ生産と流通の様相について検討した。原澤は大阪など関西以西への取引に重心をおいており、名古屋の業者が荷物を取りまとめて送り、全線開業したばかりの東海道線を利用して、大阪や山陽の仲買へ取り捌くという流通ルートであったとみられる。

## 4. 結論

このように、清内路村は18世紀以降たばこ作を展開させることにより、林業にとどまらない村の存立基盤を作り上げてきた。とはいえ、近世における移出品は未加工の葉たばこが中心であり、村内での加工業は生育せず、たばこ刻みの職人らは出稼ぎを主とした生業を営んでいた。こうした状況が劇的に転換するのは明治初期の地租改正と煙草税の導入であり、こうした負担が増大する状況を打開するために従来の在村仲買は村内で刻みたばこの加工を行い始める。近世以来の中馬を主体とする輸送だけでなく、当時の道路・鉄道などのインフラ整備と相まって、清内路のたばこ生産は最盛期を迎えたといえるだろう。